『倭訓栞』の中の万葉歌について

片山　武

6/19　公開勉強会
（講師の片山先生）

公益法人石水博物館蔵の『倭訓栞稿本』７冊が平成20年12月３日三澤薫生氏編集で勉励出版から刊行せられた。本書は谷川士清自筆本で、影印、研究編、索引もあり、貴重なものである。

倭訓栞（わくんかん、わくんのしおりとも）93巻82冊は、翻刻せられ、前・中・後編をあわせ、３冊にわけ、成美堂から明治31・２年に刊行されている。（明治36年に合本１冊、後編のみの複製も昭和44年に刊行）井上頼圀・小杉榲邨が増補した『増補語林和訓栞』は明治31年に刊行。本書は、伴信友補閲の『和訓栞』の上欄に増補語林を記し、さらに『撮壌集』など三書を翻刻し付録としたもの。（昭和43年11月名著刊行会から刊行）これが流布しているので、下欄の「和訓栞」を用いることにした。（岩波書店刊日本古典文学大辞典など参照）

以下、数例を紹介する。

＊　**あがく**　萬葉集に青駒之足搔（アガキ）と見へ（ママ）たり…

万葉集にどんな表記で掲載されているかを紹介したもの。（萬葉集①～④　新編日本古典文学全集　校注訳は小島憲之氏、木下正俊氏、東野治之氏、小学館、以下これにより提出語彙の部分は原文で、あとは書き下し文にて表記したものを掲示する。必要に応じて口語訳を付す）万葉集には巻二136歌で「青駒之足搔乎速（あおごまがあがきをはやみ）　雲居（くもゐ）にそ　妹があたりを　過ぎて来にける」〈一に云ふ「あたりは隠（かく）り来にける」〉〈青駒の　歩みが速いので〉とある。

「あがき」は名詞で、馬などが前足で地面を搔くようにする動作。アガクの名詞形。（『時代別国語大辞典上代編』による）和訓栞には意味は記していない。

＊　**あぞゝ**　万葉集にみゆ　あさあさ也今うすうすといふか如し。

この語は万葉集には見あたらない。

＊　**あたかも**　萬葉集に見ゆ恰をよめり當哉の義也字書に適當之辭と見えたり俗にいふちやうどの意也或は宛をよめりさながらと譯す詩の注に坐（ソゾロニ）見貌と見えたり　　以下巻数を①で表記

万葉集には「我が背子が　捧げて持てる　ほほがしは　安多可毛似加（あたかもにるか）　青き蓋（きぬがさ）（⑲4204）

（長官が　捧げ持っておられる　ほおがしわの枝は　そっくりですね　青いきぬがさに　新全集）

あたかも［恰］（副）ちょうど、まさしく、さながら、と時代別国語大辞典に述べ、万葉集のこの例を引いたあと、「彼気調恰（あたかも）〈アタカモ〉如_天上客_」（霊異記上13話）の例等を出している。

和訓栞に「恰」をよんだものとしているのは、霊異記や古語拾遺がこの文字を使っていることを指摘したもの、また意味も述べている。

＊　**あぶりほす**　萬葉集にみゆ焱干と書り

この例では万葉集に見られるということとどのような表記ということのみで、意味については述べられていない。わかりやすいので意味を省略したものか。

焱干（あぶりほす）　人もあれやも　濡れ衣（ぬきぬ）を　家には遣（や）らな　旅のしるしに（⑧1688）（あぶって干（ほ）してくれる　人などあろうか　濡れた衣を　家に送ってやろう　旅の証（あかし）に　新全集）

あぶる［炙］（動四）日や火の熱にあてて、焼き、あるいはかわかす。（時代別国語大辞典　万葉集のこの例を引いている。）

＊　**あまざハリ**　萬葉集に見ゆ雨障と書り雨に支らるゝ也

ここも万葉集にこの語が見られるということと表記について述べている。

雨障（あまつつみ）　常（つね）する君は　ひさかたの　昨夜（きぞのよ）の雨に　懲（こ）りにけむかも（④519）（雨がお嫌いで　出渋るあなたは（ひさかたの）ゆうべの雨に　お懲りになったのでしょうか　新全集）

士清が見出し語にしている「あまざはり」は当時の人々が読んでいたと思われる寛永20年版本のよみなど今日では「あまつつみ」とよんでいる。

あまつつみ［雨障］（名）雨にさえぎられて家にとじこもっていること。（時代別国語大辞典）［考］に、「別訓アマサハリ。しかしアマサハリという仮名書き例はなく…」とし、次の520の「雨乍見（あまつつみ）」の例がありアマツツミと訓むのがよいということで、今は「アマツツミ」の訓みをとりたい。

以上はそのわずかの例しか見られなかったが、士清がじゅうぶん万葉集を読みこみ、意味も理解していたことが知られる。

私自身こんな勉強をしていくつもりである。今後ともご指導をお願いするものである。

平成22・５／15、７／17、９／18実施　　同12／19まとめ